

○ 黒

誰かの嗚咽が聞こえる。

N 「むかしむかしある深い森の中に、涙の泉と呼ばれる不思議な場所がありました」

（明りがつく）

○ 涙の泉

泉の側で嗚咽をもらしている、涙を流す少年。

少年は、ひどくうなだれていて、涙を流している。

N 「その泉の側では、一人の少年がまいにちまいにち涙を流していました。少年には、父親と母親がいませんでした。食べるものも少なくひどくお腹がすいていました。お家がなくて身が凍るこごえ想いをしていました」

N 「少年が涙を流すと、その涙は泉の水となつて広がっていきました」

動物達がやってくる。

N 「動物たちの間では、その泉にふれたり、泉の水を飲んだりすると少年の悲しみがうつると言い伝えられていました。皆が自分の幸せを望んでいました。だから、誰もその泉にも、そして涙をながす少年にも近付きませんでした」

動物達が逃げていく。

少年、側の木の実に手を伸ばす。

N 「少年は側にあった木の実に手を伸ばします。そしてその木の実を口に入れようとして：ついに空腹に倒れてしまったのです」
倒れる少年。

少年「僕は、何の為にうまれて来たんだろう。

僕はただ：幸せになりたかった、幸せを味わって見たかった」

目をとじる少年。

N 「少年はゆっくりと目を閉じ、そして再び一筋の涙を流しました。すると少年の涙は側にある一輪の青い花の上に落ちたのです」
光とともに現れる妖精。